

一般廃棄物の再生利用率に関する達成目標の設定について

1 経緯

- 廃棄物・リサイクル部会では、国の目標値の変更や、岐阜県における実績値を踏まえ、県廃棄物処理計画の達成目標を28%から26%に見直すことが妥当とされた。
- 企画政策部会から環境審議会へ報告する環境基本計画案は、廃棄物処理計画案と整合した26%としたうえで、環境審議会でも改めて議論することとされた。

	基準年度・実績値	目標年度・値
現行計画	2018 年度・23.3%	2025 年度・28%
見直し(案)	2023 年度・21.7%	2030 年度・26%／2030 年度・28%

2 廃棄物・リサイクル部会での検討・議論

(1) 主な意見

- 直近の実績(2025年度推計値)の再生利用率が21%であり、目標値を28%にした場合、乖離が大きいのではないかと。
- 一部の市町村からは、「26%の目標値でも達成は困難」との声も寄せられている現状。
- ここ5年間の再生利用率は、高い目標を掲げていたが伸びていないのが現状。
- 社会情勢が変わってきており、出てくる廃棄物も変わってきている。
- 数値目標に固執せず、実施可能な取組を洗い出し、今後の方向性を示すことが必要。

(2) 【参考】 国の基本方針の変更(2025 年 2 月)

- 循環利用率(再生利用率)の上昇を見込んでいた紙、金属について、大きな進捗がなかったことから、引続きプラスチック等に重点的に取り組むこととしつつ、紙、金属については上昇幅を前回より低く見込み、26%に目標値を設定。

3 企画政策部会での検討・議論

(1) 28%が妥当とする主な意見

- 実態との乖離があっても、目標は高く持ち、どう取り組んでいくことが大事。現行計画の目標を、今後も掲げた方が良いのではないかと。
- 高い目標を掲げることで、県民意識の醸成につなげていくことが大事。目標を高く持つことで、新たな技術革新が起きる可能性もある。
- 目標を達成できなかったら、もう一度議論することが、次の高い目標を達成する一歩につながる。目標に向かう途中で、どう議論したかが大切。
- 最終的には完全にリサイクルできる社会を望む。計画の最終年度にはそうはならないにしても、高い目標を掲げた方が良いのではないかと。

(2) 26%が妥当とする主な意見

- 高い目標(28%)を掲げるよりも、足元の状況を見据えて着実に取り組むべきもの。
- 今後の対策を緩めるものではなく、しっかりと対策を進める前提で、26%でも良いのではないか。
- 高い目標を設定しても、絵に描いた餅に終わってしまうのではないか。
- ペーパーレス化により紙の回収量が少なくなり、リサイクルできるものが相対的に減っているという社会情勢の変化もある。
- リサイクルにはコストがかかるもの。まずは、住民の協力が得られる仕組みづくりが必要であり、目標は徐々に上げていくことで良いのではないか。

4 対応(案)

- 達成目標は、両部会における検討・議論を総合的に勘案し、26%とする。
- 目標達成に向けて取り組む施策を環境基本計画及び廃棄物処理計画に明示。
 - ・刈草や剪定枝の堆肥化や燃料化などの資源循環に関する優良事例を市町村に共有し、その実施を促進します。(環境基本計画 34 頁 廃棄物処理計画 55 頁)
 - ・市町村における廃食用油のバイオディーゼル燃料(BDF)等への有効利用を促進します。(環境基本計画 34 頁 廃棄物処理計画 55 頁)
 - ・市町村が一般廃棄物の処理を適切かつ効率的に行えるよう、必要な情報の提供や技術的助言などの支援を行います。(環境基本計画 34 頁 廃棄物処理計画 56 頁)
 - ・市町村による一般廃棄物中のプラスチックごみの実態調査の実施を促し、状況を可視化する取組を進めることで、さらなる分別収集を推進します。(環境基本計画 34 頁 廃棄物処理計画 57 頁)
 - ・県民が「ぎふ食べきり運動」に参画する機会を設けるなど、食品廃棄物の削減に向けた具体的行動の促進を図ります。(環境基本計画 33 頁 廃棄物処理計画 50 頁)
 - ・SNS などの様々な媒体を活用し、家庭ごみの減量に関する情報を発信します。(環境基本計画 33 頁 廃棄物処理計画 48 頁)